

アモス書3章2-3節 「選ばれた者たちの歩み」

1A 選ばれた者の報い 2

1B 一方的な恵み

2B 選ばれたからこそその報い

2A 一緒に歩く二人 3

本文

アモス書 3 章を開いてください、私たちの聖書の学びは今日からアモス書に入ります。1 章から 3 章までを午後に読みますが、今朝は 3 章 2-3 節に注目します。「**2 わたしは地上のすべての部族の中から、あなたがただけを選び出した。それゆえ、わたしはあなたがたのすべての咎をあなたがたに報いる。3 ふたりの者は、仲がよくないのに、いっしょに歩くだろうか。**」

アモス書の時代は、ホセアの預言と同じ時で、北イスラエルの王ヤロブアム二世の治世です。その時は、南ユダやウジヤが王で、長期政権で安定し、また周囲に勢力を持っていました。そしてヤロブアム二世も領土を広げて、それゆえ経済的繁栄を享受していました。その時に彼らが、不正を働いていたことを、アモスは指摘します。私たちの時代で言うならば、1980 年代のバブルの時期です。その時の日本の教会も、必ずしもその影響を受けていなかったようではありません。企業の成功哲学が教会にも入り込み、数や規模に物を言わせるような教えが流行っていたようです。安定し、強くなり、また豊かになることは良いことですが、それと同時に、神から離れて、偶像礼拝をし、不正を行なう温床ともなってしまいます。世間では、社会の悪について貧困が犯罪の温床であるとうことで、その対策のためにいろいろな知恵と対策が練られ、学問も確立し、その取り組みを行政や国際機関が行なっています。けれども、「富んでいる時の社会の悪」についてはどうでしょうか？ないですね、「富むこそが、問題を解決する」という前提があるからです。しかし聖書は、貧困や飢餓対策ではなく、富や繁栄対策に真正面から取り組んでいる書物です。現実には、富が問題を解決するのではなく、富んでも問題は解決しないし、富んでいるから問題が出て来るとい面もあるのです。

1A 選ばれた者の報い 2

主は、北イスラエルの人々に呼びかけられます、もう一度 2 節を読みます。「**わたしは地上のすべての部族の中から、あなたがただけを選び出した。**」これは、主があらゆる世界の部族の中から、イスラエルだけを選び出したという意味です。「選び出す」の直訳は、「親しく知っている」ということです。アダムがエバを知った、というところで使われている「知る」であります。また、モーセについて、「あなたを名指しで知ったのだから(出エジプト 33:17 参照)」と言ったところでもあります。

主が、イスラエルを恋い慕って、選び出されたことを意味しています。「申命 7:7 主があなたがたを恋い慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。」そして、主はホレブの山の麓で、イスラエルの民に、「祭司の王国、聖なる国民」となると言われました。「出エジプト 19:5-6 今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。」イスラエルは、他の国々に比べれば、力がなく、小さく、弱い集団なのに、それでも神が彼らを恋い慕われて、彼らを宝の民、聖なる国民、そして祭司の王国にしようとされています。分かり易いならば、日本国民にとっての天皇家と同じようにしようとしておられるのです。特別に選ばれた王家です。

1B 一方的な恵み

なぜ神は、イスラエルを選ばれたのでしょうか？その目的は何でしょうか？神が人との交わりを回復するためです。「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。(1ヨハネ 1:3)」主が、イスラエルを恋い慕って、彼らを知ったと言われたように、神は私たち一人一人を知りたいと願われています。交わりが断ち切れてしまったのは、人類の父アダムが、神に対して罪を犯した時です。神に、取って食べてはいけないと命じられた善悪の知識の木から実を取って食べました。それによって、神を知ることが出来なくなりました。人と人の関係が、片方の裏切り行為によって関係が立たれてしまうように、神に背信行為を働いたために、その関係が断ち切れてしまいました。しかし、全ての命は神から来ています。人はすべて、命の全てを神に頼っています。その神から断ち切れたのですから、死ぬしかありません。罪を犯した魂は死ななければならない、と聖書にあります。

主はそれで、その罪を処理する、贖う必要があります。後処理です、今、原発事故で、福島で放射能の後始末をしています。放射能より恐ろしいのは罪です。それを主は、対価として血を流すことによって解決されます。後にキリストを世に遣わし、この方が罪の供え物となってくださいます。そこで神は、キリストを世に遣わすために、そのキリストを生み出す民族また国民をお造りになられました。神に従い、神のものとされ、神と共に生きる、神と交わる、そして神の支配の中で生きる国とは何かを示そうとされました。アブラハムを神は選ばれ、召し出されました。そしてアブラハムはただ神に信頼し、神と共に歩み、それで生きていくようにされました。イサクを生み、イサクがヤコブを生み、そしてヤコブから十二人の息子が生まれました。それでイスラエルの十二部族なのです。そして、そのユダ部族からダビデが生まれ、ダビデがイスラエルの王となり、ダビデの世継ぎの子からキリストが出て来るようにされました。

そしてそのキリストによって、異邦人である私たちも神と交わるのを持つことが出来るようにされました。イエス様が、ご自身を信じて、新しく生まれることによって神の国に入ることができると言

われました。キリストにあって、イスラエルに対する神の選びが異邦人にも及んだのです。「こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でもなく寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。(エペソ 2:19)」今や主は、イスラエルに対して向けられた恋い慕い、その憐れみと愛を、私たち一人一人にもキリストにあって注いでおられるのです。

それで、イスラエルは、他の民族や国民には見られない特別な歩みを始めました。それは、神との関係、神との交わり、神への礼拝によってその国民生活が成り立っていくという歩みです。普通であれば国民生活に必要な「政治」がありませんでした。初めは、王がいませんでした。私たちに総理大臣がない、内閣がない、議会がない、最高裁がないという状態を考えてください、やっていけませんね。けれどもイスラエルは、神を王としていくなかで、統治が行なわれます。そして農耕も主が祝福の雨を注いでくださり、それで豊かに作物を育てることができます。また敵からの攻撃もそうです、大きな軍隊を持たなければいけないところ、イスラエルの戦いは人間的には貧弱なものでした。滑稽でありました。けれども主が戦ってくださり、彼らの安全は保障されたのです。自分たちの生存が神によって守られ、保障されていたのです。

2B 選ばれたからこそその報い

彼らは、そのような神との親しい関係の中で全生活を営むようにされていたのです。しかし、「**それゆえ、わたしはあなたがたのすべての咎をあなたがたに報いる。**」と主は言われます。もはや、次のような生活はできなくなったということです。「私はイエス様を信じたから、永遠の命という素晴らしい特典が与えられた。天国への切符が与えられた。これはすばらしいね。」そうではないのです、主が愛されて、主のものとして呼ばれて、主の民として生きるということは、全て主が恵んでくださることを表しており、主以外のものに頼り頼むことができないということです。自分に与えられている生活の保障は、これまでは、野生の中で生きる動物のように自分でやって来たのです。けれども、キリストのものとされた今は、栽培されている木のように、または飼育されている家畜のように、主ご自身が育ててくださいます。だから、自分が必要な時にだけやって来て、「イエス様、これこれを下さい」というものではなく、自分がこれまで自分でやって来て自分で守ってきたものも全てが、イエス様のものになっています。その中で、「イエス様、これこれができません。お願いします！」となるのです。もう、他の神を知らない人と同じようには生きられなくなったのです。そこに必要なのは、神を信じる信仰なのです。

もしかしたら、皆さんの生活が普通に送っていたのに、あるものが取り上げられたということがあるかもしれません。あるいは、イエス様に従いたいと願うのですが、これこれを捨てなければ、これ以上ついていくことができないということかもしれません。けれども、それは私たちに与えられる保証が、全てイエス様だけになるように主が召し出してくださったからです。ただイエス様だけが、自分の必要を満たし、物質的なものはイエス様との交わりを持つための手段にしか過ぎないからです。ペテロは漁師でしたが、イエス様に従っていきました。ある時に、宮の納入金の徴収に来た

人がいましたが、なんと、それを支払うお金がありませんでした。しかし、イエス様は余裕いっぱいでした。「世の王たちはだれから税や貢を取り立てますか。自分の子どもからですか、それともほかの人たちからですか。」ペテロは、「ほかの人たちからです。」と言うと、イエス様は言われました。「では、子どもたちにはその義務がないのです。」すごい、余裕しゃくしゃくですよ！あなたたちは、神の子どもたちなのだ、神の国の王子たちなのだ、だから神の宮に納入などする必要はないのだよ、ということです。そして、つまずきを与えないように、漁をして魚を釣りなさい、その魚がスタテール一枚を口にくわえているから、それで支払いなさいと言われました。(マタイ 17:24-27)

しかし、もし周りの国々と同じようにして生きていきたいとしたら、どうなるのでしょうか？イスラエルは、預言者サムエルに対して王がほしい、他の国々と同じように欲しいと言いました。それで主がサウルを与えられました。神の選ばれた、愛されるダビデは、彼自身が神を王として礼拝していたので、その国は神の支配の中で祝福されましたが、しかし長くは持たず、ソロモンは他の国々と平和を持つための政略結婚を重ね、ついに異教の神々を拝み始め、北イスラエルの王たちは初めから、金の子牛を造ってそして主を神として拝んでいるとしました。そしてヤロブアム二世の時のイスラエルです。彼らが行なっていることは、他の回りの国々と変わりませんでした。けれども、主なる神をあがめているとしていたのです。

主は、「わたしはあなたがたのすべての咎をあなたがたに報いる。」と言われます。イエス様は、「すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。(ルカ 12:48)」と言われました。他の人たちと同じようにして、どうして悪いのか？彼らはそれでうまくやっているではないか？というかもしれません。けれども、同じことをしていても、神に愛され、神に支えられ、神に備えられることを知っている者たちが、他の人たちと同じようにしたら、他の人たちのようには上手くいかないのです。イエス様は何度も、「役に立たない」という言葉を使われました。「もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。(マタイ 5:13)」主が私たちに物質的に、あるいは精神的に豊かにしようとされるとき、それは飽くまでも、神が主であることを知るための手段であります。ですから、他の人が祈りなしで何かを得ても、私たちは祈り無しでは得られないように、敢えてされるのです。全てが主から来ていることを、貴方の生活の中で証しさせるために、主の前に出て行くようにされます。

ですからイスラエルは、神の憐れみのゆえ、主を神としないで生きようとする、それだけの報いを得ます。他の民であればそこまで得ないものも、得るようになります。ユダの民が、どうして苦難が多いのかということは、そのことを物語っています。それだけの苦しみを受けているということは、それだけ神の注目が集まっているからです。神に選ばれ、愛されているからです。人間的には、苦しめばそれは神が見捨てたということになりますが、その反対です。苦しんでいるのは、神がそれだけ彼らを見捨てていないからです。彼らが他の民のようにならず、聖別された民だからこ

そ、同じように生きようとする彼らがそうならないようにされているのです。キリスト者も同じです。同じことをしても、神を知らない人がするより、もっと酷い状態になります。ペテロは第二の手紙で、このことを話しています。「2:20 主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりももっと悪いものとなります。」しかし、ホセア書にも、ヨエル書にも私たちは見ました、アモス書もそうですが、私たちが主のもとに立ち返るのであれば、主だけを神とするのであれば、主は豊か過ぎるほどの豊かさをもって憐れんでくださいます。

2A 一緒に歩く二人 3

そして主は、3 節で「**ふたりの者は、仲がよくないのに、いっしょに歩くだらうか。**」と言われます。これはちょうど、二人三脚のような歩みです。主との交わりを持つということは、主と歩調を合わせて歩かなければいけないということです。主が言われていることに自分も合わせていくのです。自分の歩調があって、主にそれに従ってもらうことは期待できません。主がそうしなさいと言われてるものに合わせていきます。主に対して、「あなたが、これこれのことをしてくださるなら、私はあなたと共に歩み、あなたについて行きます。」ではないのです。条件を付けないのです。条件を付けているということは、まだ自分のほうに何か力と知恵を持っているからでしょう。福音を信じるとは、自分には何も良いものがない、自分には力も知恵もない、哀れな人間だということ認めて、神の憐れみのところに来た者です。ですから、その恵みの中に生きる者は、神に対して条件を付けるということはしません。

主と共に歩むというのは、主が何も犠牲を払わずに、私たちが一方的に犠牲を払っているということではありません。主が支払われた犠牲の中に、私たちも招き入れるためです。神の愛は、犠牲の愛です。キリストを惜しまずに私たちに捧げた愛です。ですから、捧げる愛の中で交わるのですから、自分も犠牲を払います。アブラハムのことを思い出してください。彼は、「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。(創世 22:2)」と言われました。もし、これを神無しで見ると、とんでもない酷い行為です。カナンには幼児犠牲という慣わしがありましたから、まるでその周囲のしている忌まわしい慣わしと同じことをしているかのようです。しかし、神はこのモリヤの近くで、後にご自身の子キリストを十字架に引き渡すようにされます。神はご自身が犠牲を払うその犠牲の幻に、アブラハムにも知らせるために、彼自身の子イサクを捧げるように言われたのです。これが、愛すること、犠牲を払うところにある愛なのだということを知らせるためです。主は、ご自分と共に歩く者たちと共にいてくださるのです。

これが、選ばれた者たちの歩みです。神が私たちを愛されました。そして、ただ自分を愛する神に信頼して、その親しい交わりを保つために生きています。その他のものは、その関係を豊かにするために加えて与えられます。